

変わりものに生花の人達がウンリウとよぶものが近頃流行している。ウンリウといふ名は使いやすいと見え、いろいろなものにこの名がある。これには桑学の専門家堀田禎吉氏が札幌博物学会誌19巻(1963)ならびに植物分類地理14巻(1952)p.105に, *Morus latifolia* Poir. f. *spirata* Hotta の名を与えたとき、ウネリグワ、キウリウの和名を並記している。また別に宮沢文吾氏は観賞植物図説(1960)にこれを図説し、*Morus multicaulis* Perrott var. *distorta* の新名を与えた、コウテングワの和名を記録された。また、杉本順一氏は日本樹木検索誌(1961)にタイヘイグワといふ名を拾っている。学名の方は命名規約によりおのずから解決できるからよいが、和名となるとそれらをおぼえておかないと困ることがある。それにしても、ロソウ、ログワ、マルグワ、モチグワなどの名を持つ種類の変りものに相当するものに、ウンリウは別として、ウネリグワ、タイヘイグワ、キウリウ、コウテングワの名があることを記しておく。

9) オオホナガアヲゲイトウ これは、いまここで提唱する新名で、それは私が *Amaranthus palmeri* Wats. と同定するものに与えたものである。もし私の同定が正しいとすれば、それは、北米西部のもので米国各處で、鉄道線路や路傍にあるという。この草は現在わが国にいたるところで見られるホソアオゲイトウに似たものであるが頂穂が太く、1-3 dm にも達するもので、苞片は針爪状で、乾けば外方に反り返っている。本品は雌雄異株で、私の入手したものは雌本であって吉岡重夫氏が、門司税関附近で採集されたものである。雄本の存否については不明であるが、もし雌本だけならこの年限りのものであるが、まさかそんなこともあるまい。

(東邦大学薬学部)

○ 植物門の和名について (木村 陽二郎) Yojiro KIMURA: On the Japanese names of plant-phyla

昨年10月2日、岡山での植物学会大会で「植物の体系と系統」と題して講演したが、そのときに全植物を16の門に分類し、各門の和名は次に記すようにした。簡単にするために次の各群の和名のあとに記す植物門、植物、門、または類などの語はここでははぶいて記す。

1. 細菌 Bacteriophyta	2. 藍藻 Gyanophyta
3. 炎藻 Pyrrrophyta	4. 黄藻 Chrysophyta
5. 褐藻 Phaeophyta	6. 藻菌 Phycomycophyta
7. 古菌 Archimycophyta	8. 粘菌 Myxomycophyta
9. 真菌 Eumycophyta	10. 紅藻 Rhodophyta
11. 緑虫 Euglenophyta	12. 緑藻 Chlorophyta
13. 輪藻 Charophyta	14. 藓苔 Bryophyta
15. 羊齒 Pteridophyta	16. 種子 Spermophyta

このようにすべて二字に統一してみたのであるが、炎藻、黄藻はすこし目新しくて果して一般に受けいれられるであろうか。藻の字は当用漢字にないのが私には不満である。藍藻、藓苔も当用漢字にないが、これを青藻はまだよいとしても、鮮台で代用したくはない。シダ、コケはよく使われているが、これも統一のためにここでは用いなかつた。なお、学会での講演は英文論文として整備し、木村有香博士記念論文集(東北大学紀要)に寄稿した。

(東京大学教養学部)